

『クレヴの奥方』における「告白」の構造とその意味

I 「告白」と「拒絶」

『クレヴの奥方』以前にも心理分析小説は存在した。がこの作品のすい星的出现があまりにも輝かしかったために、他の星くずたちは軽くなり消され、これがフランス文学史上「最初の心理小説」と呼ばれることに抗議しても無益なこととなった。この、発表当時大評判となり、その後長い年月の試煉をへてもなおゆらぐことなく文学史上の古典となったという点で、ドストイェフスキの『罪と罰』にもくらべられるであろう、十七世紀のラ・ファイエット夫人の作品『クレヴの奥方』での心理分析の軌跡は、「告白」と「拒絶」とで二つのアクメを描

いた。

前者は、してはならない恋の告白であり、後者は受けいれてよい恋の拒絶といえようである。『クレヴの奥方』について、そのあらすじをここで改めてくわしく述べるほどのゆとりはないが、「告白」をやや具体的に述べると、クレヴ夫人は結婚してからはじめて、アンリ二世の宮廷で評判の美男・ヌムール公と出会い、恋に落ちいっている自分を知って苦しみ、このことを夫のクレヴ公に告白するのである。つまりこのカッコつきの告白は、夫に対してする他の男への愛の告白という特殊なものであり、いっぽう「拒絶」は、夫クレヴ公の死によって自由の身となったはずのクレヴ夫人が、こ

萩原茂久

のうえなく熱心に迫ってくるヌムール公をまえにして、相手への愛を告白しながらも相手の自分への愛を拒絶するという、その拒絶である。

「告白」の場合もそうであるが、また「拒絶」の場合も、一つの極限状況にはなく選択と自由とがまだ許される、あるいはすでに許された状況のなかでおこなわれる。やはりラ・ファイエット夫人の作と今日一般にみなされている短篇小説『タンド伯爵夫人』にも「告白」があるが、その場合は女主人公が長く夫と夜をともしないで、愛人によって妊娠するという状況のうちに「告白」がおこなわれる。要するに、『タンド伯爵夫人』の「告白」と『クレヴの奥方』の「告白」とでは、前者では状況がせつばつまっていてそのほかの道をとることが考えられないのに反して、後者では告白するかしなないかで選択がおこなわれうる余地がある。同様に「拒絶」の場合でも、夫がすでに死んでいる以上クレヴ夫人は世俗的・客観的にはヌムール公の愛を受けいれてもいっこうにさしつかえなく、つまり受けいれるもいれないも自由の状況にある。従って拒絶の理由はどうぞん道德的あるいは慣習的ではありえず、「分析的」になるという結果

にみちびかれる。

このようにして、一つの状況はたいいてい一つの結果・一つのすじみちしかみちびき出さないために存在するといふ、十九世紀的小説美学の視点からすればやや異質な、しかし文字どおりの心理小説の足跡がしるしづけられたのである。つまり真の心理小説とは、主体にとって選択の許される、自由な状況が設定され、与えられる小説であり、必ずしも従来考えられてきたような心理的決定論に支えられた小説ではない。

さて、私がこれから説明しようと望むのは、このような意味での典型的心理分析小説『クレヴの奥方』の、「告白」についてである。

II 「告白」に対する同時代人の反響

「告白」そのものの分析にはいるまえに、このことがらの同時代人による受けとられかたがどうかであったかを見すぐして通りすぎるわけにはいかない。当時として有力な文学雑誌であった「メルキュール・ガラン」が、その主筆がサヴォワ宮廷からの補助金をラ・ファイエット夫人の仲介によって受けとっていたという事情からであ

ろう、『クレヴの奥方』を世に出すために、大いに活動したことが記録によって知られている。この雑誌は一六七八年三月『クレヴの奥方』が出版された翌月すでに、「この『貞淑な妻』である奥方がヌムール公への恋愛を夫に告白したのは、正しかったか、まちがっていたか」についてのアンケートを発して読者の意見を求めた。

しかし一出版社の巧妙なやりかたがあつてはじめて、「告白」が同時代人たちに注目されたのであろうか？

私は決してそうではないと考える。なぜ、「告白」についてでなければならなかったのか？「クレヴの奥方」が夫の死後、ヌムール公の自分に対する愛を拒絶したのは正しかったか、どうか」のアンケートだって考えられたはずである。また、この雑誌の存在理由が、パリの社交界で評判になっている作品をとりあげ、おそらくはパリでおこるできごと・流行に非常な好奇心を抱いている地方のひとたちにそれを知らせると同時に、サロンにおける論議の主題を彼らにも提供することにあつたことは、いくつかの理由からかなり容易に推定できるのであり、この作品が出版と同時に大へんな評判となり、すでに「告白」について議論が盛んにとりかわされていたこと

はまちがいないであろう。

「メルキニール・ガラン」は臨時増刊号も含め、合計五つの号をついやして「告白」の問題をとり扱ったが、地方のすみずみに生活する比較的教養ある人士たちから返ってきた意見のうち、大多数はクレヴの奥方のとった行為に賛成しなかった。また、このアンケートとはべつに、同時代人の批評としてその記録が残されているものにセヴィニエ夫人のいとこ、ビュッシイラビュタンの彼女あての手紙があり、それにはつぎのようにしている。

「クレヴの奥方が夫にする告白は常規を逸しています。実話の場合だったらいいかもしれませんが、けれどもひとに喜ばれるための物語りとしては、女主人公がこんなにも異常な気持ちをもつというのはこっけいです。作者は良識に従うということよりは、他の小説とはちがうのだということに意を用いすぎてこうしたのでしょう。妻というものはその夫に、自分を他の男が恋していると打ち明けるのさえまれなのに、自分の方から夫以外のある男が好きだなどというはずがありません」(一六七八年七月ごろ?)

アンケート結果の最大公約数といい、このような標準的教養人士と目されていたひとの意見といい、「告白」をとりまいたのは否定的な空気だったことが察せられる。もっとも、このビュッシー・ラビュタンの意見を検討してみると、そこには当時の小説美学と倫理性という二つの批評眼が複合しているのが見られるが、いまそれをこまかに論ずるのは本論の趣旨ではない。そしてその小説美学も結局のところは時代の良識から出てそこに回帰している点からして、クレヴの奥方の行為は「常規を逸し」「異常」で、「良識に従」わず、不自然なものであるとみとめられていたことは結論できるであろう。

「告白」が同時代人たちからもこのように見られていたことは、それがじゅうぶん検討するに価するような構造と意味とをもっていることの証拠だと私は信ずる。すなわちその構造は「論理的」では決してありえず、語の表わす最大限の意味において「心理的」であるはずであろう。

III 源泉あるいは影響力としての他の作品の「告白」

さて、ラビュタンなどよりもっと文学に専門的なヴァランクールは、この「告白」がすでに発表されているヴィルディエウ夫人の『愛の混乱』中に描かれた「告白」と類似していることを指摘した。『クレヴの奥方』の主題についての某侯爵夫人への手紙(一六七八年末)これは一種の盗作問題ともいえるが、他人の作品から多く借りることは十七世紀においてはとくに非難されるほどの文学現象ではなかった。しかしヴィルディエウ夫人の才能をラ・ファイエット夫人が高く評価していないとすれば、このような指摘はとうぜん彼女の誇りを傷つけたであろう。ヴァランクールの意見に対して約六カ月後に反ばく文『クレヴの奥方』の批評についての会話』が、シャルヌ師という署名をつけて発表された。それは、「告白」がコルネイユの『ポリウクト』にヒントをえたのだと弁明している。

ポリウクトの第一幕では、ローマの地方長官フェリクスの娘ポリイヌはすでにアルメニアの領主ポリウクトの妻になっている。彼女にはローマの騎士セヴェールという婚約者があったが戦闘中に行くえ不明になってしまっていた。ところが、そのセヴェールは生きていて、栄光

に包まれ皇帝の寵を一身に集めながら帰ってくる。フェリクスは彼の恨みを恐れて娘に、彼を迎えるよう嘆願した。第二幕にはいると、ポリイヌの結婚など夢にも知らないセヴェールは、第一場で腹心のファビアンと対話する。後者はすでにポリイヌの結婚を知っていて、主人の期待にみちた姿に心を暗くする。気がついたセヴェールはファビアンを問いつめ、ついに愛する女性が二週間まえに結婚したことを知った。セヴェールは怒りに燃え、痛苦に落ちいり、ポリイヌに会おうとする。ところがポリイヌの方からとつぜんやってきたという形で、問題の第二場が始まる。ポリイヌはもし自分で結婚相手がえらべるのだったら、あなたの死んだうわさなど問題ではなかった、が父の決定にはさからえず、もはやなんのいい訳もしないという。そのひややかな態度はセヴェールに、「あなたはなんと幸福なんだろう！」と叫ばせてしまう。せめて泣いてくれたら、ため息をついてくれたら、少しは救われたろうに——。ポリイヌは外見はどんなであろうと、心の動揺と混乱はいうこともできないくらいだといい、セヴェールの魅力が自分を圧倒していることをかくさずに打ち明ける。ポリイヌは必死に、貞淑であるべ

き義務を知らせ、このような恐ろしい対話はやめてくれるよう嘆願する。そして「あまりにも不幸で、あまりにも完全な愛人」であるセヴェールと、「あまりにも貞淑で、あまりにも魅力的な対象」であるポリイヌとは、たがいに「アディウ」といいあう。

——これを見ると、『クレヴの奥方』の「告白」の場との相違が大きいとはだれにもいえないであろう。まずその状況に大きな差がある。前者の「告白」は、愛するひとに對する夫に關しての告白であり、後者の「告白」は夫に對する恋びとに關しての告白である。つまり關係が逆になっているが、それはよいとして、重要なことは前者では秘密というものが存在しない。ポリイヌの結婚は周知の事実であるし、セヴェールはファビアンからあらかじめそれをきいてしまっている。これに反してクレヴ夫人とヌムール公とのあいだがらはだれにも知られていない秘密のものであり、夫のクレヴ公はなんら予備知識なくいきなり「告白」に接するのである。私にいわせれば、前者の「告白」は相手に對する他の關係の告白という一面以上に、どのような事情の変化にもかかわらずやはりあなたを愛しているという意味の、悲恋

的な愛の告白という一面を大きく含んでいる。それはどちらかといえば、『クレヴの奥方』の第二の告白、すなわちクレヴ夫人がヌムール公に対して彼を永遠に拒む直前にした告白と状況が似ている。

しかしその精神状況においては、共通する点があるのを見のがすわけにはいかない。それは「告白」を受ける対象が悲痛な声のしたから発する謝罪と賛美のことばにもとづいている。

「ああ、きみよ、わけ知らぬ悩みを許してほしいもはや行きすぎた不幸をしか見わけられないその悩みを。」

これほど正しい義務のこよなく高い努力を、わたしは心変わりとなづけ、罪と思っていたのだ」

(『ポリウクト』第二幕第二場)

「妻よ、おまえの方こそわたしを憐れんでくれ。わたしはそうされていい人間だ。わたしがこれほどげんし悲しみに最初からぼうぜんとしてしまって、おまえの勇氣ある告白にふさわしい返事もできずにいるとしたら許してくれ。おまえはこの世のどんな婦人にもまして尊敬され賛嘆されてよいと思う。……おまえの告白はあまり

にも高貴なものだから、わたしは安心に身をゆだねきらないわけにはいかない。……おまえのわたしに寄せる信頼と誠実さは限りなく貴い……」(『クレヴの奥方』第三部)

こういう一つの精神状況に私は大きな類似を見ないわけにはいかないが、これだけでラ・ファイエット夫人が「告白」について『ポリウクト』を手本としたといい切ってしまうことはできない。しかしここでもう一つ、私があげなければならぬと思う点がある。それは『クレヴの奥方』の「告白」の場が、他のどんな部分よりも「戲曲的」であるという特徴に關している。

テミーヌ夫人の手紙紛失・偽造事件によって完全にヌムール公への思慕をみずから確認したクレヴ夫人は、心の平安をかき乱されまいとして、愛人と宮廷の生活とをのがれようと思い、クロミエの別荘に引きこもるのであるが、なにも知らない夫クレヴ公は彼女をバリへ連れもどそうとする。その場面が別荘の庭のあずまやであって、建物とその周囲とを検すればつぎのようになる。このあずまやはヌムールがクロミエの森まできたとき見つけた、りっぱな道に沿ってやってきた結果、その道の

はてに存在したものであった。ヴァランクールがその建てかたを理解できないといっているこのあずまやは、その内部に大きなサロンがあり、それに二つの小室が付属している。一つの小室は花園に向かってひらかれ、その花園と森とは生け垣一つをへだてただけとなっている。もう一つの小室は庭園の広い道に面している。さてヌムールはこのあずまやにはいつて景色に見とれていたのだが、クレージュ夫妻が大ぜいの供の者たちを従えて歩いてくるのが見えたので、とっさに身をかくす気になる。彼は花園に面した方の小室にはいる。そのまま森の方にひらかれたドアから外に出るつもりだったところ、クレージュ夫妻があずまやのしたに腰をおろし、供の者たちも庭のなかに足をとどめたのを見、彼らは夫妻のいる場所を通らなければ彼のいるところへはこられないのを見てとったので、クレージュ夫人の美しい姿を見る喜びと、彼ら夫妻がどんな話をするのかという好奇心にうちかたれてしまった。そういうわけでヌムールはその小室のなかで、サロンにいる夫妻の会話を立ちぎきすることになる。

この場合、もしクレージュ夫妻が休んだのちに、森のな

かを散歩することになったら、ヌムール公は一瞬でも身をかくしていられないはずだというヴァランクールの意見がある。危急の場合には彼らに見つかることなく、この小室と花園とを越え逃げられるだろうかという彼の疑問はもっともなものであろう。そのことが頭に生じてこない者はいなかったとヴァランクールがいうのも、当時のサロンのひとびとの一般的な意見として受けとることができよう。しかしそれはこの作品を小説として見たからではなかったか？ もしそれが劇であるならば、自然性や写実を無視していくつかの約束があり、観客にはきこえる舞台上の一登場人物のセリフが、他の登場人物にはきこえないことになっていたり、舞台上の四、五メートルの距離がはてしない遠さだと想定してもらおう約束もある。場所や建物の位置関係、登場人場の配置など、この個所は劇の舞台を頭に思いうかべて書いたとしか思われないあるものに支えられている。ヴァランクール自身さえも、「劇であったなら、この個所はすばらしい効果を生み出すであろう」という考えを抱いたのだったが、これは逆の方向から見れば、この「告白」の場が演劇によってつよく影響されていたのだという私の推定を裏づ

けてくれる、一つの有力な意見となる。当時もっとも尊敬されていた劇作家といえはコルネイユであるのは疑うことができないのだから、その一作品『ポリウクト』をも含む彼の作品が、ラ・ファイエット夫人に靈感を与えたことはたしかであろう。しかしそれ以上のものであるともいえないのである。

それならば今度は、ヴィルディウ夫人の『愛の混乱』の「告白」の場との関係はどうであろうか。

『愛の混乱』は一つの物語りではなく、「告白」を含むテルム夫人の話は、第二部の『ベルガルド元師の物語り』の題名のもとに属する。この作品の女主人公テルム夫人はよく知りあうことなくテルム侯爵と結婚したのであって、夫を愛していない。夫の方ははじめはそうでもなかったが、あとになると妻に夢中になる。彼女は夫の親切さに対してひやかで、なにも感じないように見うけられるが、ひとりでいることを求め、社交界をのがれて、ついには悲しみからくる病氣になってしまう。テルム侯爵は失望し、不安にさいなまれる。彼は妻から少しもはなれようとしなない。あるとき不意に妻が涙に泣いている場を見つけてしまう。「告白」の場はここから始

まる。夫はその涙の原因となっているものを知らずにはいられず、妻に懇願し、約束し、夫としての權威を用い、命令をくだしさえした。テルム夫人は長いあいだいうまいとつとめていたが、責めたてる夫に負け、ついに他の男に對する愛を告白する。彼女は子どものときから、夫の甥のベルガルド男爵をげしく愛していて、相手の方にも彼女への愛情があったのだ。この夫への告白によって、いっぽう慰めと防衛とがえられはしないかと考えたのもあったが、ほんとうは夫からはなれ、彼の熱心さを厄介ばらいたためではなかったか。「これほどまれな、これほど率直な告白はいい表わしようのない痛苦を与えて侯爵の心を刺しつらぬいた」(ハーリー・アシントン『ラ・ファイエット夫人——その生涯と作品』付録所載) 夫は結婚を解消し、全財産を妻と甥に与える手つづきをとったうえで死んでしまう。その結果テルム夫人とベルガルド男爵は結婚するが、まもなくあきてしまうという結末がやってくる。

ラ・ファイエット夫人はその「告白」に『ポリウクト』をこそ模範にしたのだという説に全面的に賛成し、『愛の混乱』との類似を否定するアンドレ・ボーニエ

（『ラ・ロシュフーコオの女友だち』を単純にみとめることはできないが、ひとまずその理由に耳を傾けてみよう。テルム夫人はただ単にその夫を追いはらうために告白したにすぎないのであって、その「告白」は一種の戦術であると思われるのに反して、クレヴ夫人はあらゆる困惑を「告白」によって解決しようとしたのであり、きわめて純粋な真実以外のどのような意図もたなかったのだと、彼はいう。「告白」の動機がちがいをこのように表現することは、ヴィルディウ夫人に対して少しばかり先入見をもちすぎているといわなければならない。テルム夫人もまた夫に対して貞淑であろうとする努力を、恋愛情熱に苦しくもちかちつしつづけてこなかったわけではない。

『「こんな状態にいるあたくしを考えてくださいまし」と彼女は涙にくれながらつづけた』世にこれ以上不幸な者がいるでしょうか？

あなたはあたくしが愛情を捧げるのにふさわしいかたです。それをあなたに捧げることがあたくしに不可能ではありません。でも、あなたの愛情にふさわしくないことをするくらいだったら、むしろ死ぬ方をえらんだでしょう。

あたくしは若いベルガルドを遠くに追いやりました。ですからあたくしたちの結婚以来、あのひとがこの地方にやってこないのをあなたもお気づきになっていたでしょう。あのひとが現れないでいるのはあたくしの命令があったからなのです。あたくしはあのひとにろくに手紙もやりませんでした。あたくしに手紙をよこしてはいけないと、きびしくあのひとに禁じました。そうすればあたくしの生活が、彼との親しいいつときの対話を生きがいとして要求するときでも、それによって自分の身を危険にさらさないですむでしょうからね……』

『愛の混乱』の「告白」と『クレヴの奥方』の「告白」とには明らかに類似の主題がある。受けたショックが原因となって夫の死がやってくることも、また注目すべき点であろう。ただ、クレヴ夫人は相手を拒みとおして結婚しなかったのに反して、テルム夫人は結婚し、やがてあきてしまうという結末がつく。またベルガルド男爵はテルム夫人と彼女の結婚まえから愛しあっていたが、ヌムール公はクレヴ夫人と彼女の結婚後にめぐりあうという点、状況の設定にちがいがあがあるが、この方は高所に立った眼から見れば大した問題ではない。

ラ・ファイエット夫人が『愛の混乱』の「告白」を利用したろうということは可能性の高いことがらであるが、しかししんじつそうであったとしても彼女とヴィルディウ夫人との人生観・才能の差はそれぞれの「告白」を、ひいては作品全体を質のちがったものにした。ヴィルディウ夫人はたしかにラ・ファイエット夫人ほど用意周到ではない。『クレヴの奥方』は「告白」のために書かれた小説だといひ、その伏線が七十ページもまえから張られているのを発見することによって、用意周到な「告白」のための内的必然性をあばき出したのはハリーイ・アシュトンの功績ではあるが、だからといって「告白」というものの着想をはじめたのはラ・ファイエット夫人だという意見を、信ずる点にまで行くことはできないと私は考えるし、また実のところ、このような内的必然性——状況の論理性というものを発見したところで真の心理小説の解明にはなんのプラスにもならないことを、ふたたび強調しておかなければならない。

『クレヴの奥方』の「告白」にかかわって問題とされる作品として、古典劇の『ポリウクト』と小説の『愛の混乱』のほかに、もう一つ実話が存在する。これは

『クレヴの奥方』が出版される年の『メルキュール・ガラン』一月号にのつたもので、アンドレ・ポーニエによれば、この実話の題名は本文と目次の場所で異なり、本文においては『題名のないニュース記事』とされたものが目次では『不幸な徳、実話』とされるされていた。そのあらすじを述べると、愛なしに結婚した妻が他の男を慕うようになり、その恋愛からまぬがれようとしていなかへ行き、パリに帰るよう説得する夫に自分の恋愛を告白してしまう。そのときちょうど恋びとの侯爵がとりのへやにいて、ひとこともき洩らさずぬすみぎきする。やがて夫は他の女性を愛すようになり、彼女も侯爵と逢う瀬をたのしむが、もう会わないようにしてほしいと相手にたのみ、絶望した侯爵は軍隊にはいる。夫は妻がこうする口実を与えたのだといひ訳しながら悪行をつづけるが、四日のうちに病気で死んでしまう。侯爵はもどつてくる。が、もはやうわさが流れてしまったあとでは、彼と結婚することは思いとどまらなければならず、彼女はついに修道院にはいる。

この「実話」の「告白」と、『クレヴの奥方』の「告白」とは、たしかによく似ている。似すぎているという

ほどである。『クレヴの奥方』が出版される二、三ヵ月まえにこれが発表されたことといい、またその発表場所が全面的に『クレヴの奥方』の宣伝に力を貸すことになる「メルキュール・ガラン」であることといい、作者と編集者とのあいだに協定があつてされたことだと推定しないわけにはいかない。『クレヴの奥方』の予備的な宣伝の意味で同類の物語りをのせたのか、あるいは作品のいちばん問題になりそうな部分を中心として構成しなおし、実話として発表することによって読者の眼をならしておいたのか？ ボーニエは大胆にも盗作説をもつて推定した。つまり『クレヴの奥方』の内容が知られ、作者の同意なしに他の実話につくり変えられてしまったというのである。ラ・ファイエット夫人は嚴重な抗議を申しこんだであろう、それだけでなく大へんな義理のある彼女に対して編集者側はひどく恐縮、その謝罪のためにきょくりよく作品の宣伝につとめたのであると――。すこぶる巧妙な推定ではあるが、うがちすぎているという感がしないでもなく、決定的な実証に欠ける以上、まえの推定の方がまだしも実際的であるといえよう。とにかく私のいいたいのは、この場合は両者の「告白」を

比較検討してもほとんど無益であろうということである。

IV 解決の手がかりとしての、同じ作者による他の作品の「告白」

私の意見としては、『クレヴの奥方』の「告白」を説明するために、盗作あるいは影響の問題とからんで当時の他の作品を検討することはもちろんなおざりにはできないことであるが、さらにラ・ファイエット夫人自身の手になる『クレヴの奥方』以外の作品をよく調査・検討することが、より以上に問題の核心に深く入りこむ原動力を与えてくれる。従来の研究者たちは、「告白」に関して『タンド伯爵夫人』をとりあげ一応の比較検討を忘れなかったが、他のものについては眼を向けようとはしなかった。

ラ・ファイエット夫人の手になる作品のうち、『モンパンシエ公爵夫人』は十六年、『ザイド』(共作者の問題はべつとして)は約八年(二度に分けて刊行されたため)、『クレヴの奥方』の発表に先行している。また小説ではなくメモワールとしての『アンリエット・ダングルテールの物語り』は死後出版であるが、書かれた時期

は有力な証拠により約八年以上先行している。ただ、『クレヴの奥方』は短い期間に書かれたものではなく、一六七二年ごろ執筆開始説が有力であるから六年ほど年月をついやしたものとみなされるが、いずれにしてもこれらの作品は『クレヴの奥方』よりも以前に執筆されたことになる。『タンド伯爵夫人』についてはその執筆時期を推定するなんらの証拠も発見されていず、ラ・ファイエット夫人の作かどうかとも疑わしいとする少数意見もすっかり消えさっていない現状であるが、一般に『クレヴの奥方』以前執筆(『モンパンシェ公爵夫人』執筆の時期とかさなるというのがその一例)と、以後執筆(「告白」への非難にこたえて、必然的な「告白」を描いてみせた、というのがその理由の一つ)との二つが存在する。このような問題にそれることは本論の趣旨に反するのでこの程度にとどめるが、私の意見としては、この短篇が一般にラ・ファイエット夫人の作とみとめられている以上、とくに「告白」についてどちらが原因であり結果であるかはべつとして、とにかく濃厚な類縁関係をもっていさえすれば、「告白」解明の有力な資料として以上のものに加えられる資格を十分にもつのである。

1 習俗としての「秘密の打ち明け」

「告白」とは、いちおうその特殊な状況を伏せて考えるならば、秘密を打ち明けることであり、従ってそれは「秘密の打ち明け」とある重要な関係によって結ばれると私は考える。その点において『アンリエット・ダンテルテール』と題されるあのメモワールでは、「秘密の打ち明け」が物語りの進展にいくつかの重要な契機を与えているという事実が気がつく。十七世紀の古典劇には、男の主人公にはコンフィダン、女の主人公にはコンフィダントがつくのが見られるが、これらの「秘密の打ち明け相手」あるいは「腹心」、またあるときは「相談相手」「助言者」の役割りを演ずる彼らは、家臣・傳役・友人・召使いであり、侍女・乳母・女友だち・いとこなどである。そういう役がらの存在は、主役たちの意図や感情、秘密の思いなどを観衆に伝えるという作劇術の必要性や効用から生みだされたものもあるが、やはりそれは現実に存在し、習俗として有効に働いていたものであった。人間はひとりだけの秘密の重みに苦しむものであり、この秘密をだれかと分けもつことによって心を軽くする

必要が生ずる。ざんげ聴聞僧という制度の存在する国ぐにはなおさら必然的なものであり、名誉をもち、疑惑と不信のなかで心理的には孤立して生きる宮廷・社交界のひとたちにとっては、さらに欠くことのできない問題であつたろう。策略と陰謀に勝ちぬくためにはだれか信頼できる者が必要であり、また身分の高い貴族では、侍女・家臣・召使いという名の人間たちがそのまわりに垣をつくっていて、ひと目につかずに自由に近づけるといふこともなく、行動するには他人を用いなければならぬといふという事情がある。ひとは信じられぬにもかかわらず、だれかを信じなければならず、その者には秘密が洩れるのをゆるさなければならぬ。『アンリエット・ダングルテール』は、こういう世界特有の悲劇を扱った作品だといってもよいくらいである。

モンタレーという侍女はその「秘密の打ち明け」を最大限に悪用した一典型として描かれる。狡猾な彼女はルイ十四世の愛人ラ・ヴァリエールのコンフィダントになるが、王はつねづね彼女にそういうものをもたないよう注意していたのであった。しかし、平凡な能力しかもたない若い女が、王から愛されるといふような大事件を自

分の胸だけに包んでいられないのは当然であろう。つぎにモンタレーは、やはり王から愛されたことがあり、いまはひそかに若いギイシュ伯爵と心をかよわせあっている王弟妃アンリエット・ダングルテールに接近し、この方のコンフィダントになることも成功し、これらの秘密をすべて自分の愛人に通報していた。こうして彼女は宮廷内の陰謀や不和・争いの原因をつくり、自分たち一派の立ち場を有利にしようとするのが綿密に描かれる。そうしてその種のが原因となつて、アンリエットとギイシュ伯爵は悲しいわかれを告げるといふ、カタストロフを迎えるのである。

2 「秘密の打ち明け」から「告白」への移行態

『モンパンシエ公爵夫人』では、その女主人公がシャパンヌ伯爵に対して、ギイイズ公爵への彼女の愛を告白する。『クレヴの奥方』の「告白」を基準として考えると、この「告白」は心理状況に少しばかりの差がある。シャパンヌ伯爵にとってモンパンシエ公爵夫人は愛する対象であるが、逆に後者にとっては前者は愛の対象外の内容存在であり、自分の友人であり、秘密の打ち明け相手で

しかない。だから彼女が他の男へのどのような愛情を打ち明けようとも、彼女の心のなかには恐れもためらいも苦しみもない。しかし一方のシャバンヌ伯爵には、その「告白」はクレーヴ公の受けた打撃ほどに深い打撃を、その受けた痛苦ほどに深刻な痛苦を与えたのであった。

このように、打ち明ける側からすれば相手は秘密の打ち明け相手にすぎず、逆に打ち明けられる側からすれば相手は愛する対象であるというつまり、「秘密の打ち明け」でもあり同時に「告白」でもあるものがここに存在する。これはきわめて興味をひく移行態であるが、このような形はもう一つ『ザイド』にも発見される。

『ザイド』は決して単一な物語りではなく、数個の物語りを巧妙に接合した複合的物語りであって、その一つのなかに見いだされるが、それはザイド(女主人公)とフェリーム(そのいとこの女性)とアラミール(男主人公)とをめぐっておこる。タルスの貴公子アラミールはザイドに夢中になっているが、彼を愛しているのはザイドではなくてフェリームである。ザイドはフェリームの気持ちなどには気がつかず、自然にフェリーム

をコンフィダントにえらび、アラミールが自分に対して示す気持ちについてそのつど報告する。この打ち明け話はフェリームの心を苦しいものにさせる。けっきょくザイドがアラミールを愛してはいず、彼からはなれようとしていることがよくわかってくれば、フェリームの心は安心しないということもないが、この打ち明けが一時的には大へんな痛苦をその心に与えたことはいうまでもない。しかしこの場合、同性同士のあいだに「秘密の打ち明け」——「告白」の関係が生ずるところは、『モンパンシェ公爵夫人』とかなりちがう点であろう。

3 強制された「告白」

『ザイド』での「アルフォンスとベラズィールの物語り」に「告白」が存在するのを私は指摘したい。ベラズィールは今日の愛人である彼アルフォンスに、過去の異性であるラル伯爵の、自分に対するついにみのることのなかった恋愛情熱を語った。この「告白」は結果において狂気のまじった嫉妬をアルフォンスに引きおこし、それは妄想的な次元にまで高まり、さらにかくしているにちがいないと疑われる新しい事実の告白を強要するに

至るのである。いまは死んでしまって、この世に存在しないラール伯爵へのはげしい嫉妬が、今度はふたりのあいだをとりなそうとした友人のドン・マンリックに転位し、ある夜彼女にあいびきにきたのだと誤認したアルフォンスはドン・マンリックを刺しころし、その結果ベラズィールは世を捨てて修道院にはいるという結末になる。

「告白」の結果が悲劇的という点では、基準となる『クレージュの奥方』の「告白」とひとしいといえるが、その「告白」は告白者が主体的におこなったものではなく、しかもその「告白」を引きだそうとした最初の動機において異なっている。

「ぼくはまもなく彼女と結婚しようとしている男がもつはずの、まったく特権的な気持ちで、彼女を見ていました。ある日、これがぼくの不幸の始まりになってしまったのですが、彼女の過去の恋びとたちが彼女になにをしたか、そういうことをみないってくれないかと、彼女に頼んだのです。彼女の彼らへのあしらいかたと、ぼくへの取り扱いのちがいを見て、たのしもうとしたのでした」

つまりアルフォンスは非常な不安とか、疑惑とか、苦

悩によって最初相手に告白させたのではない。むしろ自分のゆとりと自信がそのことをそのかした。そしてベラズィールの方も、せっぱつまった気持ちになって口をひらいたのではない。しかし二度めからの少しずつの告白では事情が一変する。アルフォンスはついに手紙にして知らせるように頼み、ベラズィールもそれが相手の心を満足させ、しずめてくれるものと期待して、ラール伯爵が自分にしたことの細部をいちいち思いだしては手紙を満たし、アルフォンスに送る。それは彼女の期待したものとは逆の結果になるのであるが、この点に期待が裏切られるクレージュの奥方との相似を見ることができる。しかしなんといっても、ベラズィールの方はラール伯爵を愛していなかったのを考えると、根本的な三角形の図式に差異のあることはみとめなければならない。

V 「告白」の動機・実行・結果についての考察

1 「意識の気まぐれ」としての「告白」

『タンド伯爵夫人』における三角関係は、タンド伯爵夫人とその夫タンド伯爵、彼女の愛人ナヴァール公との

あいだにうち立てられる。彼女は結婚して夫を愛するが、夫の方は非常に若い彼女を子どもとしてしか眺めず、やがて他の女を愛するようになる。ところで彼女の女友だちと結婚してナヴァール公となった騎士ナヴァールは、結婚の夜すでにタンド夫人のまえに現われて熱烈な告白をする。ふたりはいっしょにいるところを夫に見られさえる。そのうちナヴァールは軍に召集され、この恋愛も次第に過去のものとなって行ったが、すでに彼女は妊娠していた。ナヴァールは戦死し、彼女は病いに倒れ、夫は憐れみの気持ちから妻を見舞うが、ナヴァールの死が妻をたえられなくさせているのを見て、ついに永久にわかれることを決心する。翌朝夫の出院するときに、タンド夫人は一切を告白した手紙を侍女の手をへて夫に渡す。夫は衝撃を受けるが、栄光をこよなく重んずる彼は復讐よりも恥のうわさをおさえることを決心し、自分の評判が安全であることを知ったタンド夫人は一種の安らぎをおぼえ、婦徳と悔い改めに没頭、子を死産したのち息を引きとって行く。

——以上のあらすじに含まれる「告白」については、研究者のすべてが触れているといつてよい。もしビュッ

シイラビュタンが生きていてこの作品を読んだとしても、この「告白」について「常規を逸している」などとはいわなかったであろう。この意味では『クレイヴの奥方』の「告白」とは対極的な位置のうえに立っている。

女主人公が一方のはプラトニックな恋愛に終始しているのに反し、他方は現世的で肉体的な関係にはいるために、ついに破滅するという行動の仕方においても、両者はもちろん対極的である。クレイヴ夫人は夫を愛してはなかったとしても、少なくとも尊敬と感謝とは抱いていた。しかしタンド夫人は夫を、もちろん愛してもいないし、尊敬もしていたとは思われない。前者はヌムール公を愛していたとはいえ、その人格を尊敬してはいず、宮廷人としての浮薄な面をもよく認識していたが、後者の場合は愛情も尊敬も、ほとんどすべてナヴァール公の方に向かっていった。そしてタンド夫人の「告白」はぎりぎりの状況でなされた。彼女は愛人によって妊娠し、やがてそれはだれの眼にもかくしように現われてくるであろう。しかも不和となっている夫とは、もう長いあいだ夜をともにしていない。彼女は客観的にも主観的にも追いつめられていた。従ってその「告白」が「月並み」であり

「品位に欠ける」(H・アシュトン)のも無理のない結果である。これに反して、クレージュ夫人の「告白」はほとんど意識だけに命じられておこなわれるものであって、表面的にはゆとりをもった告白であり、「意識の気まぐれ」(A・ボーニエ)と名づけたくなるひともあるほどのものなのだ。タンド夫人も告白するか、子どもが生まれてしまうまで待つか、という意味では選択の余地があったかもしれないが、それは単に時間の問題にすぎない。クレージュ夫人の場合こそ自由であり、選択は彼女自身にまかされていた。

つけ加えれば「告白」の形式もちがっている。クレージュ夫人の「告白」は口頭でされるのに対して、タンド夫人では手紙によってなされる。このような「告白」が女性によって簡単に面と向かっていえることがらではないこと、そしてこの夫婦がすでに話しあいの基盤を失っていること——このように見ると、手紙によって「告白」がされるということは、人間的でもあり、また自然でもあるといえる。

2 徳としての「真実」の「告白」

クレージュ公は妻から「告白」を受けたとき、これ以上はなくけ高く、感動的な態度をとる。そのさいに発した賛美のことはすでに述べたが、一時絶対的な存在・神の位置にまでのはろうとした彼も、悲しいかな、たちまち相対的な存在に落ち、人間的にならざるをえない。その妻の相手というのが、いったいこのだれかを知ろうとし、その態度は世間一般の夫と同じようにしつこいままになる。この夫の態度の急変——いやクレージュ夫人が錯覚していたばかりにその出現を予期しなかっただけの態度に出あって、彼女はいったいどのような態度を示しただろうか。

『いくらお責めになっても無駄でございます。わたくしは、いつてはならないと思われることでしたら、どこまでも黙っております。いましがたあんな告白をしましたのも、わたくしの弱さのためではないのでございます。そうではなくあれば、かくしておこうと考えるよりは、真実を申しあげるべきだと思いましたがこそ、勇気をふるって申しあげたのでございます』

『あなたはわたくしのまごころだけで満足なさるべきだと存じます。これ以上お問いただしにならないでく

ださいまし。……』

『まあ、あなたはわたくしのいまのような告白のなかに、なにかかくし立てがあるかのようにお考えなのでしょう。わたくしはああ申しあげなければならぬ理由があつて、申しあげたものではございません……』

(以上第三部)

クレイヴ夫人は罪を告白したのか？ そうではない、真実を告白したのである。この誇り高きは、「秘密」を告白したのでも、まして「罪」を告白したのでもなく、「真実」を告白したからこそ出てくるものなのである。

真実を告白することが正しいという思想は、『アンリエット・ダングルテル』のなかに源泉として存在している。ルイ十四世は自分にとって好ましくないものであっても、つねに真実を告白することを相手に求めていた。「妃殿下はいつも真実をいうことでこの迷宮から脱けだそうとされ、その誠実さが、彼女の王のおそばでの位置を保証させたのだった」

アンリエット・ダングルテルがこの徳によって王に愛されたのに反して、ラ・ヴァリエールは真実をかくしてうそを述べたために、一時王の不興をこうむってしまった。

う。このようにして、そこにある「告白」は『クレイヴの奥方』の「告白」に、真実の有効さ、秘密の不都合・不利益の認識という、一つの核を供給していることは疑うことができない。

3 外部構造としてのざんげ・聴聞

クレイヴ夫人のヌムールに対する心の関係と、夫に対する心の関係とはまったく違ったものであった。夫は告白の場で、ただ支えを見いだす存在としてえられた、ちょうど人間的に自然で、しかも濃厚な関係について、そのような関係が絶たれているざんげ・聴聞僧に告白して助言と支えを見いだすように。この場合大事なのは告白者と告白を受ける者との確立された関係であつて、告白される内容が悔い改めるべき「罪」であるか、誇らかな、そして相手に感謝を要求する資格さえあるほどな「真実」であるかは問題ではない。このような関係は、一つの宗教儀礼としてざんげ・聴聞の制度がしかれている国では、安んじて、むしろ習慣的に、そしてたとえそれが錯覚的であろうとも立ち立てられることができる。告白者とそれを受ける者とは人間的な関係にはすでない。

クレヴ夫人は夫を絶対的な存在とみなしていた。そのことの錯覚であったことは、告白してしまったあとで気がつかれた。夫はやはり相対的な存在にすぎなかったという発見が、「告白」の実行後に彼女によってなされたのである。

「夫も出発し、クレヴ夫人ひとりになって、きょうおこったことをよく考えてみると、彼女は大へんなことをしてしまった、ほんとうにあったなんてとても思えないくらいのことをしてしまったと思った。自分から夫の愛情と尊敬とを押しつけ、自分からとてもはいあがることのできない深淵に身を投げたようなものだと思うのだ。どうしてまたそんな向こうみずなことをする気になったのか、考えてもわからなかった。少しもそんなことをする企てはなかったのに、ついうっかりはまりこんでしまったと思うのだ」(第三部)

しかしこの後悔はただ一瞬だけのもので、そこには認識のすべてを逆転させるような力は少しもなかった。

4 内部構造としての自己愛

クレヴ夫人はすぐに自己自身に立ちかえり、その心

で正当化がおこなわれる。

「けれども、この療法がどれほど荒っぽいものであるとしても、ヌムール公に対して身を守る手段がほかにはないのだと思うと、少しも後悔する必要はない、少しもやりすぎではなかったと考えられた。……夫にあのような貞淑さのしるしを与えたことを、うれしくさえ思うのだ。……」(第三部)

「告白」の対象となったクレヴ公の方は、ますます悩み多い人間へと墮して行き、嫉妬によって亡霊をつくり出す役割りを避けることはできず、ヌムール公が妻の相手だと知ったのちに、ついに彼女の「告白」を断罪するに至るのである。

『そうです。おまえはまちがっていました。……おまえはよくに理性をたもてというがそれは無理だ。おまえは、ぼくがおまえを熱愛していることも、おまえの夫であることも、忘れているんだ。恋びとであるだけでも、夫であるだけでも、このような場合に冷静でいられるわけがない、それなのにぼくはその両方なんだ……』(第四部)

クレヴ夫人は夫が人間であり、相対的な存在であり、

自分を愛している異性であることを忘れて、自己愛によってこの告白をおこなった。たしかにそうである。大事なことは、夫に対してすまないから、良心の苛責をおぼえるから、クレイヴ夫人がヌムール公への愛を断ちきろうとするのではないことである。問題は自分自身を愛して安らぎをえるか、ヌムールを愛して不幸に落ちいるかの面上に展開する。これがコルネイユ流の義務と心情とのたたかいという低く平面的な思想とは、ラ・ファイエット夫人の作品が異なる最大の相であろう。すなわち義務と心情とのたたかいはそこでは、いつのまにか心情と自己愛とのあいだのたたかいに次元的に変化している。

VI

「秘密の打ち明け」^{オシヤイダシ}と「エゴチスム」

このように考察してきた結果、「告白」は宮廷・貴族社会において一つの習俗のようにおこなわれた「秘密の打ち明け」に基礎、あるいは裾野をもち、宗教儀礼の一つであるざんげ聴聞という外部構造と自己愛という内部構造によって成りたっていることがわかる。「秘密の打ち明け」からすれば「告白」は、その一つの絶頂、一つの極北、一つの「前例のない」特殊例であるというべき

であって、『クレイヴの奥方』でこの問題が扱われたのはけっして偶然ではなかった。「秘密の打ち明け」はもちろんだの世界、どの時代にも存在しないわけではないが、とりわけ野心と愛欲の典型的な世界、名誉と栄光とにないあわされた陰謀と疑惑・不信のうずまく閉じられた社会においてはひときわ強調された意義をもつことになる。秘密をたもつことが必要であればあるほど一方ではその開放を求める。であるから、「秘密の打ち明け」は相談相手・助言者・計画の実行協力者を求めてされるだけではない。ルイ十四世から愛されるという、あまりにも名誉ある秘密をもったラ・ヴァリエールのように、従来での表現法でいえば虚栄心の満足——いいかえれば自己愛への喜びのために対象の選択は二のつぎにして「秘密の打ち明け」はされるのであり、またクレイヴ公が適切にも定義したように、「自分の心配ごとをひとりでもちきれないで、それをきいてもらって慰められようとする」(第三部)ために、それにふさわしいと思われるひとを相手として「秘密の打ち明け」はされる。いずれにしても、常識的な表現によれば心の満足ないし心の救済という心理的動機がそこに働いている。

これらの場合、コンフィダン、コンフィダントとなるひとは、自分と無関係の者ではありえないが、しかし打ち明けられる秘密に対して直接関係はない者・第三者・利害関係がないので公平無視の立ち場は立てるひとであることはいうまでもない。「秘密の打ち明け」はこれら二つの条件——すなわち心の満足ないし救済が求められること、その相手は親しいひとで信頼でき、しかも公平無私の立ち場にあること——が満たされなければならぬ。この必要にして十分な二つの条件が満たされなかったならば、「秘密の打ち明け」は悲劇に終わるであろう。クレヴの奥方は第二の条件を無視した。

いいかえれば「告白」とは、第一の条件だけで第二の条件が満たされなかった「秘密の打ち明け」なのである。心の救済のために、あまりにも濃厚な利害関係をもつ対象に打ち明けたとは、クレヴの奥方のおろかしさ、浅はかさからきたのであろうか？ ある意味の未経験さと無知さとはあったであらう。しかし「秘密の打ち明け」の第二の条件をあえて踏みにじったところにこそ、彼女の存在の特異な意味、ひいてはこの作品独得の意味が見いだされる。

私はここに一つの「エゴチスム」を見いだす。「エゴチスム」は十九世紀にできた概念であるから、この場合エゴチスムの源流を見いだす、といった方がより適切ないいかたかもしれない。自己について語る喜び、その細部について語る喜びはたとえばスタンダールにおいては享樂や感動をみずから分析することによって倍加させる分析精神にまで発展するが、ここには自由な主体性だけがあつてなんら他者に束縛されることはない。第一の条件だけがあつて第二の条件が踏みにじられた「秘密の打ち明け」——いいかえれば対象との相対性・人間的関係を無視した、主体だけのためにある状況における秘密の打ち明け、つまり「告白」は、「重荷からの極度の解放」(『モンパンシエ公爵夫人』——女主人公がシャパンヌ伯爵にギユイズ公への彼女の気持ちを告白する場面での作者の分析)・心の救済・心の満足を単に動機としてもっているだけではなく、「エゴチスム」と同じく全体構造的にそれを指向しているのである。

(一橋大学講師)